

原 著

移動、読み、書きに関する援助要請課題における 弱視学生の支援ニーズ、援助要請意図、個人要因の関連について

相羽 大輔*・河内 清彦**・柿澤 敏文***

本研究では、移動、読み、書きの課題に対する弱視学生の支援ニーズと援助要請意図の関連、及び、それらに及ぼす個人要因の影響を検討した。51名の弱視学生に質問紙調査を行い、各課題に対する支援ニーズ、援助要請意図、個人要因（性別・支援を受けた経験・日常生活の不便さ）を尋ねた。その結果、全ての課題に共通して、個人要因に関係なく、弱視学生の支援ニーズが高いことが見出された。それにも関わらず、弱視学生の援助要請意図は低く、支援ニーズがあっても援助要請に躊躇する傾向が見出された。書きの課題においては、この傾向に性別や支援を受けた経験が有意な影響を及ぼしており、女性が男性よりも、また、支援を受けた経験有群が無群よりも援助要請が容易であることが示された。したがって、書きの課題において援助要請に躊躇する弱視学生については、支援を経験させることで彼らの援助要請意図を高める可能性が示唆された。

キー・ワード：弱視学生 援助要請 障害開示 障害学生支援

I. 問題と目的

高等教育において、弱視学生が円滑な学生生活を送る上で不可欠な支援を得るためには、まず、障害開示により弱視という状態を周囲に理解してもらうことが重要である（相羽・河内, 2010; Fichten, Lennox, Robillard, Wright, Sabourin, & Amsel, 1996）。その上で、見えにくい故に学生生活上の困難が生じたときは、積極的に援助要請を行い、周囲の教職員や健常学生に支援を求めることが重要となる（相羽・河内, 2011; Lynch & Gussel, 1996; 日本学生支援機構, 2012; 富田・相羽・河内, 2010）。したがって、弱視学生の高等教育支援を考える場合には、大学側の環境整備に加え、彼らの援助要請を促進させ

ることが必要となる。

一般に、援助要請を促進するためには、援助要請を行うか否かという意識、すなわち、援助要請意図を高めることが重要である（永井, 2009, 2010; 高木, 1998）。この援助要請意図には、困難に陥っている個人が持つ「直面した課題を解決するために必要な支援を受けたい」という欲求（以後、支援ニーズ）が影響しており、支援ニーズが高ければ、援助要請意図も高くなるということが報告されている（永井, 2009, 2010; 高木, 1998; 田村・石隈, 2006）。また、その支援ニーズの高さには、課題の種類が影響を及ぼすことが報告されており（永井, 2009, 2010; 永井・新井, 2007; 野崎・石井, 2004; 高木, 1998）、例えば、怪我や病気のような緊急事態に関わる課題と、宿題を手伝ってもらうといった資源提供（時間・労力）に関わる課題では、前者の方が支援ニーズは高く、援助要請しやすい

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

** 筑波大学

*** 筑波大学人間系

いことが見出されている(野崎・石井, 2004)。

一方、弱視学生の場合は、このような資源提供に関わる課題であっても、支援ニーズの高いことが考えられる。なぜなら、彼らが日常生活で直面する困難さは主に移動、読み、書きの課題であり(相羽・河内, 2011; 日本学生支援機構, 2012)、これらの課題を解決するためには周囲の健常学生からの支援が欠かせないからである。しかし、弱視学生の場合は、障害に対する社会の否定的態度や援助要請に対する消極的反応を危惧するが故に、支援ニーズを持っているにも関わらず、実際の援助要請に躊躇する者も多い(Frank, 2000, 2003; Glover-Graf, Janikowski, & Hadley, 2003; 弱視者問題研究会, 2007, 2009)。このことから、弱視学生の場合には、支援ニーズと援助要請意図の関係が先行研究(永井, 2009, 2010; 高木, 1998; 田村・石隈, 2006)と必ずしも一致するとは限らないため、両者の関係について検討することが必要と考えられる。

また、支援ニーズの高い弱視学生が援助要請に躊躇するのはなぜかを明らかにするためには、どのような課題に対し、どのような弱視学生が援助要請意図を低下させているのかについて検討することが重要と考えられる。

ところで、援助要請に影響する個人要因についてみると、一般には、性別や支援を受けた経験が影響を及ぼすことが報告されている(Deane & Todd, 1996; 水野・石隈, 1999; 永井・新井, 2007; 高木, 1998; 高木・妹尾, 2006)。このうち、まず、性別については、男性の方が女性よりも一般的な課題において援助要請に抵抗を示すという結果が見出されている(水野・石隈, 1999; 永井・新井, 2007)。このため、弱視学生の場合にも、男性の方が女性よりも援助要請意図は低いことが予測される。

次に、支援を受けた経験についてみると、こうした経験がその後の支援提供に対する援助要請者の態度に影響することが報告されており(高木, 1998; 高木・妹尾, 2006)、特に、問題解決に役立つ支援を受けたことがある者ほど援助要請や支援提供に対する態度は肯定的になるこ

とが見出されている(高木・妹尾, 2006)。弱視学生が高等教育以前に経験できる支援については、視覚特別支援学校や弱視学級との連携で提供されるものが多いこと(池尻, 2005)から、こうした支援がどのように援助要請意図に関わるかについても検討する必要があると考えられる。

この他、弱視学生の援助要請には、彼らの見え方からくる日常生活上の不便さが影響するものと考えられる。なぜなら、日常生活においては、不便さを抱えている弱視学生ほど、視覚補助具などの支援ツールを使う傾向にあること(中野, 2011)から、そのような者ほど援助要請もしやすいと考えられるためである。ただし、このような個人要因の影響については、課題解決のためにどのような支援内容を援助要請するのかによっても異なることが報告されている(島田・高木, 1994)ため、上記の課題ごとにその影響も異なる可能性もあり、実際に検討をする必要がある。

そこで、本研究では、弱視学生の援助要請を規定する要因を明らかにするために、弱視学生が学生生活で主に困難を抱えている移動、読み、書きの課題(相羽・河内, 2011)を設定し、それぞれについて、弱視学生の支援ニーズと援助要請意図の関連を検討した上で、それらに影響を及ぼす個人要因(性別・支援を受けた経験・日常生活での不便さ)が何かを解明することを目的とする。

II. 方法

1. 参加者

国内の視覚障害関連団体を介して集められた弱視大学生及び大学院生51名(男子35名・女子16名)を対象とした。なお、参加者の平均年齢は男子($M = 23.1$ 歳, $SD = 3.4$)、女子($M = 20.2$ 歳, $SD = 1.2$)であった。

2. 手続き

郵送法による個別質問紙調査を2007年11月から2009年1月の間に実施した。調査依頼については、調査実施者が各参加者に直接行った。

移動、読み、書きに関する援助要請課題における弱視学生の支援ニーズ、援助要請意図、個人要因の関連について

この際、調査実施者は、調査目的と研究倫理に関わる説明を行い、各参加者から本研究への任意協力の同意を得た。質問紙調査の方法は、各参加者の状態に応じて最適な形式をとった。このため、回答方法は、拡大冊子（24名）と電子データ（27名）の両方を用い、回答場所及び回答時間は、各参加者が自由に設定できるようにした。なお、質問紙には、「同性、同学年で、初対面の健常学生に援助要請を行うことを想定して質問に回答してください」という教示を含めた。

3. 質問紙の構成

(1) 支援ニーズ：移動、読み、書きの3つの課題に対する弱視学生の支援ニーズの測定には、相羽・河内（2011）が上記の課題に対する健常学生の支援意識を測定する際に用いた援助要請尺度の項目を採用した。本尺度には、移動の課題を解決するために、目的地までの誘導や対象物への接近などの支援内容を要請する9項目（例えば、教室の空いている席がわからないので、空いている席まで誘導してほしいと頼む場合など）、読みの課題を解決するために、文書の代読や検索作業などの支援内容を要請する7項目（例えば、読みたい本のタイトルを見分けることができないため、図書館で代わりに本を借りてきてほしいと頼む場合など）、書きの課題を解決するために、書類などの代筆支援を要請する3項目（例えば、事務に提出する書類の枠が小さくて記入できないため、代筆をしてほしいと頼む場合など）の計19項目が含まれている（Table 1）。これらの項目の回答形式については、支援が「必要ないと思う」（1点）、「どちらかといえば必要ないと思う」（2点）、「どちらともいえない」（3点）、「どちらかといえば必要だと思う」（4点）、「必要だと思う」（5点）の5件法であった。

なお、各課題に含まれる項目について、それぞれ主成分分析とCronbachの α 信頼性係数の算出を行ったところ、いずれの場合も松井（2006）の基準を満たしており、十分な等質性と内的一貫性が確認された（Table 1）。

(2) 援助要請意図：上記3つの課題における援助要請意図の測定には、支援ニーズと同様の項目（相羽・河内, 2011）を用いた。これらの項目に対する回答形式についても、支援ニーズに準ずる形式で、援助要請が「できない」（1点）から「できる」（5点）までの5件法であった。

なお、各課題に含まれる項目の等質性と内的一貫性を支援ニーズと同様の手順で確認したところ、いずれの場合も松井（2006）の基準を満たしていた（Table 1）。

(3) 個人要因：援助要請をする弱視学生の意識に影響を及ぼす個人要因として、性別のほか、視覚特別支援学校や弱視学級等で支援を受けた経験（以後、経験）があるか否かを尋ねた。経験の有群は25名、無群は26名であった。

また、見え方を踏まえた日常生活上の不便さをとらえるため、新聞の文字を読む際に、弱視レンズや拡大読書器などの視覚補助具を用いるか否か（共用品推進機構, 2000）を尋ねた。これに基づき、視覚補助具を活用する者は不便さ有群（36名）、活用しない者は不便さ無群（15名）とした。

4. 分析方法

支援ニーズと援助要請意図のそれぞれについて、各課題における総和得点を項目数で割った値を算出し、支援ニーズと援助要請意図を示す変数（順に、支援ニーズ得点、援助要請得点）として用いた。

これに基づき、まず、各課題における支援ニーズが個人要因により異なるか否かを検討するため、各個人要因（性別・経験・不便さ）の群別に、支援ニーズ得点の平均値と標準偏差を算出し、対応のない t 検定による比較を行った。

次に、先行研究（例えば、永井, 2009, 2010）で指摘された同種の課題に対する支援ニーズと援助要請意図が関連するという対応関係が本研究においても見出されるか否かを確認するため、3つの支援ニーズ得点と3つの援助要請得点の相関係数を算出した。この上で、各課題について、弱視学生に援助要請を躊躇する傾向がみられるか否かを検討するため、支援ニーズ得

Table 1 各課題に含まれる項目の主成分分析の結果、及び、Cronbachの α 信頼性係数 ($n = 51$)

課題	項目	支援ニーズ		援助要請意図				
		第 I 主成分 負荷量	Mean	SD	第 I 主成分 負荷量	Mean	SD	
移動	A1	駅の料金表が遠すぎて見えないので、切符を代わりに買ってほしいと頼む場合	.75	3.71	1.30	.74	3.86	1.18
	A2	授業を受ける教室の場所がわからないので、一緒に連れて行ってほしいと頼む場合	.77	3.80	1.02	.80	3.37	1.36
	A3	授業後に集める感想文の提出先が学科別で区別できないため、代わりに提出してほしいと頼む場合	.76	3.59	1.15	.82	3.63	1.22
	A4	大学の立食パーティーで、どこに料理があるかわからないため、代わりにお皿にとって来てほしいと頼む場合	.76	3.78	1.21	.77	3.57	1.40
	A5	コンパで行ったお店が暗すぎて、トイレの場所がわからないため、誘導してほしいと頼む場合	.69	4.16	0.99	.80	3.35	1.47
	A6	混雑している駅では、後からついていくのが大変なので、肘か肩をかしてほしいと頼む場合	.76	4.12	1.11	.70	3.73	1.36
	A7	水溜りが見分けにくく、踏んでしまうことがあるので、班の場所まで誘導してほしいと頼む場合	.69	3.25	1.31	.70	2.94	1.32
	A8	授業中、黒板に書かれた班割が見えないので、班の場所まで誘導してほしいと頼む場合	.77	4.06	1.01	.86	3.55	1.40
	A9	教室の空いている席がわからないので、空いている席まで誘導してほしいと頼む場合	.83	3.90	1.02	.85	3.45	1.33
		固有値			6.56			10.08
		第 I 主成分寄与率			57.10%			62.38%
		Cronbach の α 信頼性係数			.90			.92
読み	B1	欲しい物を探し出すのに時間がかかるため、買い物を手伝ってほしいと頼む場合	.71	3.73	1.06	.79	2.78	1.49
	B2	掲示板が遠すぎて読めないため、休講の掲示内容を読んでもほしいと頼む場合	.56	4.27	1.04	.82	3.25	1.43
	B3	普通サイズの文字では読めないで、あなたがゼミで発表する資料を拡大してほしいと頼む場合	.83	4.00	1.13	.86	3.14	1.41
	B4	履修便覧の文字が小さすぎて読めないため、時間割づくりを手伝ってほしいと頼む場合	.80	4.00	1.13	.81	3.45	1.51
	B5	読みたい本のタイトルを見分けることができないため、図書館で代わりに本を借りてきてほしいと頼む場合	.88	3.59	1.30	.69	2.88	1.42
	B6	クラス会の集合場所がわからないため、迎えに来てほしいと頼む場合	.77	3.69	1.21	.84	3.71	1.38
	B7	課題図書を早く読まなければならないため、対面朗読をしてほしいと頼む場合	.78	3.75	1.16	.78	3.39	1.31
		固有値			5.64			9.19
		第 I 主成分寄与率			60.92%			64.86%
		Cronbach の α 信頼性係数			.88			.90
書き	C1	事務に提出する書類の枠が小さくて記入できないため、代筆をしてほしいと頼む場合	.77	3.94	1.03	.83	3.76	1.29
	C2	出席カードが小さすぎて書けないので、代筆してほしいと頼む場合	.83	4.10	0.98	.91	3.65	1.31
	C3	授業中、プリントの記入欄が小さすぎて記入できないので、代筆をしてほしいと頼む場合	.88	4.02	1.14	.91	3.53	1.33
		固有値			2.33			4.05
		第 I 主成分寄与率			70.11%			78.74%
		Cronbach の α 信頼性係数			.78			.86

移動、読み、書きに関する援助要請課題における弱視学生の支援ニーズ、援助要請意図、個人要因の関連について

Table 2 各課題における個人要因別にみた支援ニーズ得点平均値、標準偏差、及び、*t*検定の結果 (*n* = 49)

個人要因	課題	Mean (SD)		<i>t</i> 値	<i>df</i>
		男性 (<i>n</i> = 33)	女性 (<i>n</i> = 16)		
性別	移動	3.90 (0.64)	3.96 (0.73)	0.27 <i>n.s.</i>	47
	読み	3.97 (0.74)	3.95 (0.63)	0.10 <i>n.s.</i>	47
	書き	4.09 (0.67)	4.20 (0.75)	0.54 <i>n.s.</i>	26.80
		無群 (<i>n</i> = 24)	有群 (<i>n</i> = 25)	<i>t</i> 値	<i>df</i>
支援を受けた経験	移動	3.84 (0.68)	4.00 (0.65)	0.83 <i>n.s.</i>	47
	読み	3.85 (0.77)	4.08 (0.61)	1.15 <i>n.s.</i>	47
	書き	3.94 (0.71)	4.30 (0.64)	1.86 <i>n.s.</i>	46.07
		無群 (<i>n</i> = 15)	有群 (<i>n</i> = 34)	<i>t</i> 値	<i>df</i>
日常生活の不便さ	移動	3.83 (0.77)	3.97 (0.62)	0.67 <i>n.s.</i>	47
	読み	3.79 (0.70)	4.05 (0.70)	1.19 <i>n.s.</i>	47
	書き	3.93 (0.59)	4.21 (0.72)	1.42 <i>n.s.</i>	35.68

(注 1) *n.s.* $p \geq .05$

(注 2) 書きは前提条件を満たさなかったため、ウェルチの方法を用いた。

点と援助要請得点の回答の強度に基づく人数のクロス集計表を作成し、 χ^2 検定と残差分析を行った。

さらに、各課題における援助要請意図に及ぼす個人要因の影響を検討するため、支援ニーズと同様の手順で、対応のない *t* 検定による比較を行った。

なお、本研究では、それぞれの支援ニーズ得点及び援助要請得点の平均値よりも ± 3 標準偏差離れ、結果に影響すると判断されたデータについては、外れ値として処理した。このため、各分析の人数は異なった。

Ⅲ. 結果

1. 各支援ニーズに及ぼす各個人要因の影響

Table 2 に、3 つの課題について、それぞれ支援ニーズ得点の平均値及び標準偏差を各個人要因の群ごとに算出し、*t* 検定を行った結果を示した。どの課題においても、支援ニーズには個人要因による有意差が見出されなかった。そこで、課題ごとに、弱視学生全体の支援ニーズ得点の平均値を算出すると、移動 ($M = 3.92$, $SD = 0.66$)、読み ($M = 3.97$, $SD = 0.70$)、書き ($M = 4.12$, $SD = 0.69$) となり、いずれも中間値よりもほぼ 1 段階高い評価になっていた。つまり、どの課

題でも、弱視学生は「どちらかと言えば支援が必要だ」と感じる傾向を持つことが示された。

2. 支援ニーズと援助要請意図の関連

Table 3 に、3 つの課題に対する支援ニーズ得点と援助要請得点の相関係数を算出した結果を示した。全ての支援ニーズが、全ての援助要請意図に有意な関連を見出したものの、それぞれの援助要請意図については、同じ課題に対する支援ニーズがその他の課題に対する支援ニーズよりも高い相関係数の値を示していた（移動： $r = 0.50$, $p < .01$, 読み： $r = 0.52$, $p < .01$, 代筆： $r = 0.54$, $p < .01$ ）。このことから、本研究においても、同じ課題に対する支援ニーズと援助要請意図が関連し合うという対応関係が確認された。

そこで、各課題について、弱視学生に援助要請を躊躇する傾向がみられるか否かを検討するため、支援ニーズ得点の高さを参考にしながら、支援ニーズに対する反応の無群 (3.00 点以下の者)、反応の有群 (3.01 点以上の者) に弱視学生をグループ化することを試みた。しかし、移動 (有群 44 名、無群 5 名)、読み (有群 43 名、無群 6 名)、書き (有群 44 名、無群 5 名) というように、いずれの課題においても有群の人数が極端に多かったため、有群は 4.00 点を基準とし

Table 3 各課題における支援ニーズと援助要請意図の相関係数 (*Spearman* の順位相関係数) ($n = 49$)

		援助要請意図					
		移動		読み		書き	
支援ニーズ	移動	.50	**	.50	**	.37	*
	読み	.49	**	.52	**	.29	*
	書き	.38	**	.34	*	.54	**

(注) * $p < .05$ ** $p < .01$ **Table 4** 回答の強度に基づく各課題の支援ニーズ及び援助要請意図の人数と χ^2 検定の結果

課題	変数	無群		小群		大群		χ^2 値	df	
		残差(人数)								
移動	支援ニーズ	-2.79	(5)	0.98	(24)	1.41	(20)	7.93	*	2
	援助要請意図	2.79	(17)	-0.98	(20)	-1.41	(14)			
読み	支援ニーズ	-2.88	(6)	-0.65	(18)	3.28	(25)	13.55	**	2
	援助要請意図	2.88	(19)	0.65	(22)	-3.29	(10)			
書き	支援ニーズ	-3.16	(5)	1.80	(23)	0.98	(21)	10.23	**	2
	援助要請意図	3.16	(19)	-1.80	(15)	-0.98	(17)			

(注 1) 尺度得点が 3.00 以下を無群、3.01 以上 4.00 以下を小群、4.01 以上を大群とした。

(注 2) 有意な残差はゴシック体 (太字) で表示

(注 3) * $p < .05$ ** $p < .01$

てさらに二つの群に分けることとした。これにより、弱視学生のグループは、支援ニーズに対する反応の無群、小群 (3.01 点以上 4.00 点以下の者)、大群 (4.01 点以上の者) になった。また、援助要請意図についても支援ニーズと同様の基準で弱視学生をグループ化することにした。Table 4 に、支援ニーズと援助要請意図のそれぞれについて、各群の人数をクロス集計表にまとめたものを示した。これらの値について、 χ^2 検定を行ったところ、いずれの課題でも支援ニーズと援助要請意図の間に有意な関連が見出されたため、それぞれについて残差分析を行った。その結果、全ての課題に共通して有意な残差が見出されたのは無群であり、無群の人数は支援ニーズでは少ないが、援助要請意図では多いという共通点が見出された。一方、読みの課題だけに、大群にも有意な残差が見出され、その人数は支援ニーズで多いが、援助要請意図では少ないことが示された。

3. 各援助要請意図に及ぼす各個人要因の影響

Table 5 に、3 つの課題について、それぞれ援助要請得点の平均値及び標準偏差を各個人要因の群ごとに算出し、 t 検定を行った結果を示した。 t 検定の結果、書きの課題でのみ、性別 ($t(34.72)=2.09, p<.05$) と経験 ($t(43.06)=3.17, p<.01$) の個人要因が弱視学生の援助要請意図に影響を及ぼすことが見出された。このうち、性別については、女性 ($M = 4.10, SD = 0.98$) の方が男性 ($M = 3.43, SD = 1.18$) よりも有意に得点は高く、援助要請意図が高いことが示された。また、経験については、有群 ($M = 4.11, SD = 0.87$) の方が無群 ($M = 3.16, SD = 1.23$) よりも有意に得点は高く、援助要請意図が高いことが示された。なお、不便さについては、有群 ($M = 3.75, SD = 1.18$) の方が無群 ($M = 3.40, SD = 1.11$) よりも得点は高かったが、両者の間に有意差は見出されなかった。

移動、読み、書きに関する援助要請課題における弱視学生の支援ニーズ、援助要請意図、個人要因の関連について

Table 5 各課題における個人要因別にみた援助要請得点平均値、標準偏差、及び、*t*検定の結果 (*n* = 51)

個人要因	課題	Mean (SD)		<i>t</i> 値	<i>df</i>
		男性 (<i>n</i> = 33)	女性 (<i>n</i> = 16)		
性別	移動	3.39 (1.09)	3.70 (0.95)	0.97 <i>n.s.</i>	49
	読み	3.11 (1.20)	3.49 (0.96)	1.10 <i>n.s.</i>	49
	書き	3.43 (1.18)	4.10 (0.98)	2.09 *	34.72
支援を受けた経験		無群 (<i>n</i> = 25)	有群 (<i>n</i> = 26)	<i>t</i> 値	<i>df</i>
	移動	3.29 (1.14)	3.68 (0.94)	1.34 <i>n.s.</i>	49
	読み	3.05 (1.22)	3.40 (1.04)	1.09 <i>n.s.</i>	49
	書き	3.16 (1.23)	4.11 (0.87)	3.17 **	43.06
日常生活の不便さ		無群 (<i>n</i> = 15)	有群 (<i>n</i> = 36)	<i>t</i> 値	<i>df</i>
	移動	3.43 (1.14)	3.52 (1.02)	0.28 <i>n.s.</i>	49
	読み	2.97 (1.12)	3.33 (1.14)	1.04 <i>n.s.</i>	49
	書き	3.40 (1.11)	3.75 (1.18)	1.00 <i>n.s.</i>	27.72

(注 1) *n.s.* $p \geq .05$ * $p < .05$ ** $p < .01$

(注 2) 書き場面は前提条件を満たさなかったため、ウェルチの方法を用いた。

一方、移動と読みの課題については、援助要請意図に対して、いずれの個人要因も有意な影響を及ぼさなかった。

IV. 考察

1. 弱視学生の支援ニーズに及ぼす個人要因の影響

本研究では、移動、読み、書きの課題について、それぞれ弱視学生の支援ニーズが性別、経験、不便さといった個人要因により異なるか否かを検討した。この結果、どの課題であっても、支援ニーズはいずれの個人要因からも有意な影響を受けず、弱視学生の多くが支援は「どちらかといえば必要だ」と評価していることが明らかにされた。これは、「事務に提出する書類の枠が小さくて記入できない・・・」というように、本研究で扱った課題が見えにくさによって引き起こされる学生生活上の困難さ（相羽・河内, 2011; 日本学生支援機構, 2012）を反映したものであるためと考えられる。なぜなら、友人関係や学習面の悩みといった一般的な課題（例えば、水野・石隈, 1999; 高木・妹尾, 2006）の場合は、同じ弱視学生であっても、それに悩む者もいればそうでない者もいるため、支援ニーズの高さは異なるものと考えられるが、本研究

の課題の場合は、弱視学生であれば誰でもが困難を感じるものであったため、課題の違いに関わらず支援ニーズは高く評価され、結果として個人差が見出されなかったと推察できる。

2. 弱視学生の支援ニーズと援助要請意図の関係

本研究では、3つの課題について、支援ニーズと援助要請意図との関連を検討した。その結果、全ての課題の支援ニーズがそれぞれの援助要請意図に有意な関連を示したものの、各課題の支援ニーズは同種の援助要請意図との間の相関係数が最も高く、両者の対応関係が確認された。これは先行研究（永井, 2009, 2010; 高木, 1998; 田村・石隈, 2006）と一致する結果であり、弱視学生においても基本的には課題に対する支援ニーズの高い者が、同種の援助要請意図を高く持つという可能性を示している。

しかし、各課題における支援ニーズ得点と援助要請得点に関する人数の分布をみると、どの課題においても共通して、無群の人数が支援ニーズでは有意に少なく、援助要請意図では有意に多いという結果が見出された。無群は支援ニーズ得点や援助要請得点が中間値（3.00点）よりも低いグループであったことから、どの課題においても、ほとんどの弱視学生が支援ニ

ズを持っているにも関わらず、その多くは援助要請ができないと評価する傾向を持つことが示された。このように、援助要請に躊躇する傾向が弱視学生にみられるのは、彼らが援助要請しても拒否されるのではないかという不安や、援助要請により障害者であることを知られると周囲が消極的態度を示すようになるのではないかという不安を感じているためと推察される（例えば、Frank, 2000, 2003; Lynch & Gussel, 1996）。また、こうした拒絶反応や消極的反応、あるいは、隠しておきたかった障害が公になることなどのように、援助要請に伴うコストが大きい場合には、要請者は過度の負担を感じ、援助要請に躊躇することも報告されている（例えば、相川, 1989; 高木, 1998）。こうしたことから、弱視学生に援助要請を勧めるためには、援助要請に伴うコストを軽減でき、彼らが援助要請に抱えている不安を払拭できるような取り組みの検証が必要と考えられる。

3. 弱視学生の援助要請意図に及ぼす個人要因の影響

本研究では、3つの課題ごとに、弱視学生の援助要請意図に影響を及ぼす個人要因を検討した。その結果、書きの課題では、個人要因の影響が見出され、性別や支援を受けた経験が援助要請意図を積極的にすることが明らかとなった。このうち、まず性別についてみると、女性が男性よりも援助要請意図を高く持つのは、本課題で求められるプライベート情報との関連から説明できる（相羽・河内, 2011）。なぜなら、プライベート情報を親密でない相手に開示することは一般的でなく、不適切な行為と見なされるにも関わらず、対人関係における親密動機が高い女性の場合は男性よりもプライベート情報を開示しやすい（東, 1997; 相羽・河内, 2011; 榎本, 1997; 高木, 1992）、課題解決するための代筆支援を要請する際に不可欠なプライベート情報（例えば、連絡先や感想など）の開示にも寛容的であることが推察できる。しかし、独立心を強く持つ男性（東, 1997; 榎本, 1997）の場合は、プライベート情報の開示に抵抗を感

じ、代筆支援の援助要請を躊躇しやすいものと考えられる。

次に、経験についてみると、有群の方が無群よりも援助要請意図が高いという結果は、援助要請に伴う利益・コストの視点から説明することが可能である（相川, 1989; Deane & Todd, 1996; 高木, 1998; 高木・妹尾, 2006;）。なぜなら、支援を受けた経験の有群は、プライベート情報が露呈されるというコストや、それにより相手から一般的でなく不適切だという評価を受けるといったコストよりも、支援が得られれば課題解決できるという利益を重要視しているためと推察される。これに対し、無群の場合は、代筆支援が課題解決に役立つことを知らないがために、援助要請をする際、それに伴うコストだけを重視してしまい、援助要請に躊躇する傾向を示すものと考えられる。

一方、移動と読みの課題において、個人要因の影響が見出されなかったのはプライベート情報の開示を抜きに援助要請ができる問題であったためと推察される。ただし、援助要請を促進する（あるいは、抑制する）要因は、どのような支援内容を提供してもらうのかによっても異なる（島田・高木, 1994）ため、今後は課題解決のために誘導や代読といった支援内容を援助要請する際に関連する個人要因を探索的に取り入れた検討も必要と考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究では、どの課題においても、先行研究（永井, 2009, 2010; 高木, 1998; 田村・石隈, 2006）が指摘した同種の支援ニーズと援助要請意図の対応関係が確認された。

しかし、全ての課題に共通して、弱視学生はどのような者であっても支援ニーズは高かったが、その多くは実際の援助要請を躊躇する傾向があることも明らかにされた。このことから、弱視学生の援助要請を促進するためには、彼らの援助要請を抑制していると考えられる不安意識などのコスト（例えば、Frank, 2000, 2003; Lynch & Gussel, 1996）を軽減するアプローチの必要性も示唆された。

移動、読み、書きに関する援助要請課題における弱視学生の支援ニーズ、援助要請意図、個人要因の関連について

本研究の結果に基づいて、実践への提言を示すとすれば、弱視学生が援助要請をした場合に、健常学生はどのような反応を返すのか、あるいは、どのように援助要請をすれば、健常学生が肯定的反応を返すのかという情報を弱視学生に提供することが必要と考えられる。例えば、誘導、代読、代筆といった支援内容を援助要請する弱視学生に対する健常学生の支援自己効力感、いずれの場合でも高いことが報告されている（相羽・河内, 2011）。また、これらの支援内容に関係なく、健常学生の支援自己効力感は女性の方が男性よりも高いこと、視覚障害者との接触経験のある者がない者よりも高いことが見出されている（相羽・河内, 2011）。これらの情報を弱視学生が知ることができれば、彼らは安心して援助要請と向き合えるようになり、援助要請を効果的に活用できるようになることが期待される。このため、こうした情報を短期研修や障害学生支援ブックレット（NCWD, 2005）の中に取り入れ、弱視学生に提供することが有効と考えられる。

一方、各課題のうち、プライベート情報と関連する書きの課題では、弱視学生の援助要請意図に性別と支援を受けた経験の影響が見出され、女性の方が男性よりも、また、経験有群の方が無群よりも援助要請意図は有意に高いことが明らかにされた。特に、書きの課題に対する援助要請意図が低い弱視学生については、援助要請により得られる利益を理解させることが重要である（高木・妹尾, 2006）ため、障害学生支援の輪を広げ、支援を提供すること自体が、彼らの後の援助要請行動に重要な意味を持つのではないかと推察された。

今後の課題としては、援助要請に関連する可能性のある個人要因を見直した上で、移動や読みの課題に対する弱視学生の援助要請意図にそれらが及ぼす影響を検討すること、また、本研究で援助要請意図を促進することが明らかになった支援を受けた経験が、弱視学生の援助要請を抑制する要因として考えられる彼らの不安意識を払拭できるか否かについて、その可能性

を検討することも重要であろう。

付記

本論文は、相羽大輔が日本特殊教育学会第49回大会で発表した研究を、河内清彦教授と柿澤敏文教授の指導の下、再編集、再分析したものである。再分析にあたっては、平成24年度～26年度の科学研究費（基盤研究（A）No. 24243079）の「特別支援教育における視覚障害学生の鍼臨床能力向上のためのITを活用した包括的研究」からの補助金を受けて行った。

文献

- 相羽大輔・河内清彦（2010）弱視学生に対する健常学生の交流抵抗感に及ぼす障害開示の効果について. 特殊教育学研究, 48 (4), 263-273.
- 相羽大輔・河内清彦（2011）弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の効果について. 障害科学研究, 35, 7-18.
- 相川充（1989）心理的負債の大きさによる被援助事態の分類. 宮崎大学教育学部紀要社会科学, 66, 1-11.
- 東清和（1997）ジェンダー心理学の研究動向—メタ分析を中心として—. 教育心理学年報, 36, 156-164.
- Deane, F. P. & Todd, D. M. (1996) Attitudes and intentions to seek professional psychological help for personal problem or suicidal thinking. *Journal of College Student Psychotherapy*, 10, 45-59.
- 榎本博明（1997）自己開示の心理学的研究. 北大路書房.
- Fichten, C. S., Lennox, H., Robillard, K., Wright, J., Sabourin, S., & Amsel, R. (1996) Attentional focus and attitudes toward peers with disabilities: Self focusing and a comparison of modeling and self-disclosure. *Journal of Applied Rehabilitation Counseling*, 27 (4), 30-39.
- Frank, J. (2000) Requests for large print accommodation by persons who are visually impaired. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 94 (11), 716-719.
- Frank, J. (2003) *The impact of the Americans with Disabilities Act (ADA) on the employment of individuals who are blind or have severe visual impairments: Part I: Elements of the ADA accommodation request process.*

- Mississippi State University, Rehabilitation Research and Training Center on Blindness and Low Vision., Mississippi State.
- Glover-Graf, N., Janikowski, T. P., & Hadley, M. (2003) Rehabilitation counseling student disclosure of disability and use of educational accommodations. *Rehabilitative Education*, 17, 224-236.
- 池尻和良 (2005) 小・中学校の通常の学級に在籍する弱視児童生徒に係る調査について. 弱視教育, 43 (3), 1-2.
- 弱視者問題研究会 (編) (2007) 弱視者いろはカルタ. 大活字.
- 弱視者問題研究会 (編) (2009) 私の見え方紹介カード第二版. 弱視者問題研究会.
- 共用品推進機構 (編) (2000) 弱視者不便さ調査報告書—見えにくいことによる不便さとは—. 共用品推進機構 視覚情報障害班.
- Lynch, R. T. & Gussel, L. (1996) Disclosure and self-advocacy regarding disability-related needs: Strategies to maximize integration in postsecondary education. *Journal of Counseling & Development*, 74 (4), 352-357.
- 松井豊 (2006) 心理学論文の書き方. 河出書房新社.
- 水野治久・石隈利紀 (1999) 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向. 教育心理学研究, 47 (4), 530-539.
- 永井智 (2009) 小学生における援助要請意図--学校生活満足度、悩みの経験、抑うつとの関連. 学校心理学研究, 9 (1), 17-24.
- 永井智 (2010) 大学生における援助要請意図—主要な要因間から見た援助要請意図の規定因—. 教育心理学研究, 58, 46-56.
- 永井智・新井邦次郎 (2007) 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に及ぼす影響の検討. 教育心理学研究, 55, 197-207.
- 中野泰志 (2011) 標準規格の拡大教科書等の作成支援のための調査研究. 慶応義塾大学自然科学研究教育センター.
- NCWD: National Collaborative for Workforce and Disability. (2005) *The 411 on disability disclosure workbook*. Institute for Educational Leadership, Washington, DC.
- 日本学生支援機構 (2012) 教職員のための障害学生就学支援ガイド (平成23年度改訂版). 日本学生支援機構.
- 野崎秀正・石井眞治 (2004) 抑制要因に基づく大学生の援助要請行動の分類. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 53, 49-54.
- 島田泉・高木修 (1994) 援助要請を抑制する要因の研究I: 状況認知要因と個人特性の効果について. 社会心理学研究, 10 (1), 35-43.
- 高木浩人 (1992) 自己開示行動に関する認知と対人魅力に関する研究—密接な関係と密接でない関係の比較—. 実験社会心理学研究, 32, 60-70.
- 高木修 (1998) 人を助ける心—援助行動の社会心理学—. サイエンス社.
- 高木修・妹尾香織 (2006) 援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性—行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心的影響の研究. 関西大学社会学部紀要, 38 (1), 25-38.
- 田村修一・石隈利紀 (2006) 中学校教師の被援助志向性に関する研究: 状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討. 教育心理学研究, 54 (1), 75-89.
- 富田朝未・相羽大輔・河内清彦 (2010) 全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果. 障害科学研究, 34, 55-65.

Relationships among Support Needs, Help-seeking Intentions and Personal Factors of Students with Low Vision in Help-seeking Concerning Mobility, Reading and Writing

Daisuke AIBA, Kiyohiko KAWAUCHI and Toshibumi KAKIZAWA

The purpose of this study was to examine the relationships among support needs, help-seeking intentions in help-seeking tasks concerning mobility, reading and writing, and personal factors of students with low vision. Students with low vision (N=51) answered questionnaires based on support needs and help-seeking intentions of each task and personal factors (gender, experience of being supported and difficulties in everyday life). As a result, it found that each support need was positively correlated, regardless of personal factors. On the other hand, each help-seeking intention was negatively correlated; students with low vision tended to hesitate to help-seeking in all tasks. Only the writing task, gender and experience of being supported significantly influenced help-seeking intention. Females were more likely than males seek for help, and students who have the experience of being supported were more likely to seek for help than those without the experience. Therefore, students with low vision who hesitated to help-seeking in writing task will become more positive to seek for help, if they can get experience of being support.

Key words: students with low vision, help-seeking behavior, disability disclosure, supports for students with disabilities

* Graduate Course of Disability Sciences, University of Tsukuba

** University of Tsukuba

*** Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba